

## 編集後記

毎年ご好評をいただいている「JOIネットワーキングレセプション」を本年2月に盛大に開催することができました。当日は300名近くの会員の皆さまに会場まで足をお運びいただきましたこと、心より御礼申し上げます。会場でお話するなかで、機関誌の今後の特集予定（5月号「レアアース」、7月号「AI時代のデータセンター」）をお伝えしたところ、皆さまから大変有意義なご意見も頂戴しました。まさに、読者の皆さまとともに機関誌づくりをしているような心地でもあり、これもJOI編集部にとって大きな励みとなります。

また、機関誌の連載記事を楽しみにしているとお声が多かったのもうれしかったです。米・欧・中の最新情報を毎回鋭くレポートしてくださる杉田氏、木村氏、津上氏による連載について、手前味噌ながら、JOI編集部としても毎号楽しみにしており、また誇りに感じております。あらためて、連載陣の皆さまにこの場をお借りして深謝申し上げます。

さて、本特集では、急成長するアジアの都市、地方自治の現場、そして次世代モビリティという新たな変数を通じて、世界のスマートシティの現在地を描いています。「スマートシティ」は交通渋滞、環境負荷、インフラ老朽化、治安、エネルギー効率など、都市が抱える複雑な課題に対して、先端技術を使って持続可能な都市運営を実現するソリューションとして位置づけられています。「スマートシティ」の言葉の響きは華やかながらも、その舞台裏は試行錯誤と泥臭い調整の連続です。本特集を通じて、現地パートナーシップと持続的な運営力、制度設計・ガバナンス、官民連携と社会受容性などの重要性を感じていただけるのではないのでしょうか。

本号が読者の皆さまの次なる海外ビジネスを構想するうえの一助となれば幸いです。  
常務理事 沼田雄人

## 海外投融資

Vol.35 No.2 (通巻206号)  
2026年3月16日発行

発行

一般財団法人 海外投融資情報財団

発行人

五辺 和茂

〒102-0073

東京都千代田区九段北二丁目

3番6号 九段北二丁目ビル

TEL. 03-5210-3311 (代)

URL. www.joi.or.jp

制作協力

(株)エディポック

\*本誌に掲載されている記事の内容や意見は、海外投融資情報財団の公式見解を示すものではありません。

●禁 無断転載

All rights reserved. No part of this magazine may be reproduced in any form or in any means without written permission from the publisher.  
©Japan Institute for Overseas Investment Printed in Japan

## 九段だより

今月の特集は「スマートシティ」です。スマートシティと聞いて何を思い浮かべるでしょうか。これは人によりかなり違いがあるのではないかと思います。中東の大型都市構想のように、何もない土地に近代的な都市をつくるようなものもあれば、欧州の地方都市のように住民の課題を解決するためのモビリティサービスの導入もあるでしょう。どういう意味でスマートなのか、という「軸の取り方」次第で、結果としてできあがるものは変わってくるがゆえに、多種多様であることは必然なのかもしれません。他方で、多様なインフラ・サービスを提供できる企業はいないため、ビジネスとして取り組む分野としては難しさがありません。そのような難しい分野に対して、どのように取り組んでいるのか、今月の特集記事から、地に足のついた深みのあるご示唆を紹介します。

- 中国やドバイなどトップダウンでスマートシティを推進している国では、先進技術の導入に積極的で、完全無人のロボタクシーの実証認可も得られやすく、走行できるエリアも広範囲。
- 茨城県境町のように地方自治体の首長が、どのように持続可能な地域社会の将来ビジョンを描き、どのように地域の特徴を活かしながらそのビジョンを実現するのか、それが地方活性化の鍵。
- 今後、自動運転に限らずさまざまなスマートシティの取り組みを実装するための最大の課題は、失敗が起こった場合に、自治体とその失敗を乗り越えられるかという点。自治体と民間事業者が融合することで市民生活をよくしようというスマートシティの取り組みでは、自治体にも「失敗を許容する」というマインドセットの転換が求められる。
- 街づくりの本質は「つくる」ことに加えて、「どう運営し続け

るか」にあるのではないだろうか。「北ハノイスマートシティ」は不動産開発・販売の枠を超えた街づくりと、長期にわたる街の運営を見据えたプロジェクトである。

- ASEAN・南アジアの各都市では、「街全体をOSでつなぎ、将来的な街の付加価値を高める」というビジョン先行型の提案ではなく、より切実な課題解決を、最小限の投資で解決するような提案が求められる。
- 各都市のペインポイントにピンポイントで技術を投入し、確実な収益化と実績作りを狙う事業のアプローチが足元では主流となっている。

サウジアラビアなどの巨大スマートシティ構想は別として、スマートシティの主戦場は、地方都市であったり、大都市のなかの1エリアであったりするのは必然なのでしょう。課題を解決しようとするれば、目に見える課題が浮かんでくるのは小さな単位の行政区画になります。スマートシティを突き詰めると、地方活性化の議論に行きつくのですね。

中国では無人タクシーがすでに社会実装されているわけですが、インドではそのような話は聞きません。3車線の道路に、車が5台並行して走っていて、オートリキシャと呼ばれる3輪の車がすきまを狙っているカオスな路上で、自動運転タクシーが機能するのか興味はあるものの、阿吽の呼吸ですきまをすり抜けるドライバーたちと相いれない存在になるのは確実。そういえば、欧州の巨大ラウンドアバウトもインドの道路と同じ空気を感じました。スマートモビリティへの道のりが遠い国は少なくないようです。

専務理事 五辺 和茂